

九州北部豪雨における災害復興と着地型観光

—福岡県八女市星野村を事例に—

深見 聡*・高木 香織**

Disaster Recovery after the Heavy Rains in Northern Kyushu and Landing-type Tourism -A Case of Hoshino Village, Yame, Fukuoka Prefecture-

Satoshi FUKAMI, Kaori TAKAKI

Abstract

In the present century, a new form of tourism, which is a landing-type tourism (optional tour) in contrast with a departing-type tourism, has been attracting attention. The landing-type tourism is that local communities take the initiative in using local resources as tourist resources, which is also regarded as one of the effective approaches for disaster recovery. In July 2012, the area of the Hoshino Village, Yame, Fukuoka Prefecture, sustained significant damage caused by the heavy rains in Northern Kyushu. Accordingly, the author conducted a questionnaire survey targeting the residents of the Hoshino Village, who experienced the heavy rains, with an aim to understand how they see the current issues of their local communities and how they think about the possibilities of realizing the landing-type tourism. Based on the acknowledgement, the author advances discussions with the goal of determining the ways of tourism in the village in the future.

Findings from the questionnaires reveal that the residents of the village are concerned about the village's future as a tourism destination, after suffering from the disaster. In addition, as for the changes in the consciousness of residents, there is also a positive impact, as they rediscover the resources for tourism.

From these findings, it is believed that the landing-type tourism will allow the residents of the Hoshino Village to rediscover their local areas and as a result, it revitalizes local communities, leading to achieve the disaster recovery.

Key Words: Disaster Recovery, Hoshino Village, Landing-type Tourism, Consciousness of Residents

1. はじめに

1.1. 問題の所在と研究目的

21世紀に入って、地域の観光に新たな展開がみられる。それは地域住民が主体となって観光資源を発掘、プログラム化し、旅行商品としてマーケットへ発信・集客を行う観光事業への一連の取り組みである。このような観光事業の多くは現地集合・現地解散という旅行パターンをとり、「着地型観光」と呼ばれている(尾家・金井編著, 2008)。

着地型観光とは、旅行の発地側で得られる目的地

情報や発地側の観点(旅行商品の造成・販売に係る規模の経済性、商品情報の市場への伝わりやすさ等)を重視して企画・立案・実施される「発地型旅行」に対して、旅行・観光の目的地である各地域(=着地)側が有する個別の観光資源(自然、歴史、産業、まちなみ、文化等)に係る情報及び着地側での人々の観点(例:各地域での体験、学習等の活動)を重視して企画・立案・実施される観光形態である(国土交通省総合政策局, 2005)。

従来の観光においては、旅行者のニーズを把握し情報を発信するのに便利な発地型が大半であった。しかし、消費者志向の多様化にともない旅行企画が型にはまりやすいという弱点も顕在化してきた。そこで、地元の人しか知らないような穴場や楽しみ方が注目されるようになり、着地型にスポットライトが向けられつつある。地域にとっても新しい観光資

*長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

**株式会社旅工房

源を掘り起こし、都市部の旅行会社に提案する着地型のスタイルが、観光を核とした持続可能な地域づくりにつながるとして力を注ぐ事例も多い。

日本が国を挙げて観光に力を入れ始めたのは 21 世紀に入ってからである。一方で、日本人の国内観光旅行による 1 人当たりの宿泊数は、世界的な金融危機による景気低迷の影響や趣味・レジャーの多様化による旅行の魅力の相対的な低下もあり、減少傾向にある。団塊の世代の退職にともなう余暇活動が予測されたほど伸びなかったことや、年次有給休暇取得率が微増にとどまったことも主要な原因と考えられる(図 1)。

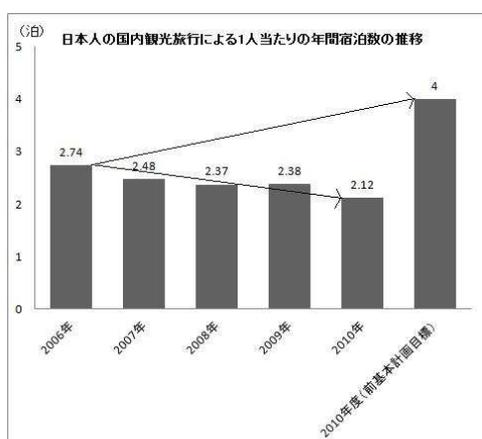


図 1 日本人の国内観光旅行による 1 人当たりの年間宿泊数の推移

注：『平成 23 年度観光白書』より筆者が作成。

このように、国内観光旅行における宿泊数は、観光庁が当初目標としていた数値とは逆に減少している。この状況において近年注目されているのが、着地型観光なのである。

また、着地型観光の事例として、平常時の地域づくりへの波及を意識したものに加え、災害から立ち上がる復興の過程において展開されるケースが増えつつある。2011 年の東日本大震災後に、ボランティア活動や消費行動としての支援、交流の機会の創出といったさまざまな取り組みは、災害復興において観光が 1 つの役割を担うことを物語っている。今回事例として取り上げる福岡県八女市星野村も、2012 年 7 月の九州北部豪雨で大きな被害を受けた。星野村は、近年、人口流出に加え、人口に占める高齢者の割合が高まる典型的な「過疎・高齢化地域」であるが、加えて今回の水害の影響で人口流出が加速しつつある。このような現状を踏まえ、災害からの復興を果たしていくには、地域が主体となり交流人口の確保を目指す着地型観光が適しているのではない

かと思われる。

また、今回の災害を契機に、住民による地域資源の見直しがおこなわれれば、着地型観光の定着と発展につながり、さらには、それが観光による災害復興へとつながる循環の構築が期待される。実際、新潟県中越地震の被災地となった小千谷では、被災自体は不幸なことであったが、その後の復興の過程で地域資源について住民自体が深く考えることになったという(深見・井出編著, 2010)。つまり、普段の日常生活においては当然と考えていた身近なものが、実は自己や地域のアイデンティティと密接につながっていることが災害を契機に意識されるようになるのである(井出, 2012)。『観光立国推進基本計画』(2012 年 3 月閣議決定)においても、東日本大震災を踏まえて観光立国推進基本法の目的である「国民経済の発展」、「国際相互理解の増進」、「国民生活の安定向上」に加え、「震災からの復興」を柱として掲げた¹⁾。東日本大震災と本稿で扱う九州北部豪雨では、災害の種類や規模に違いはあるが、災害復興を進めるといふ点においては、観光の果たす役割に注目することで地域の復興に寄与するものと位置づけられる。

そこで本稿は、福岡県八女市星野村の災害復興と着地型観光を事例に、地域住民を対象にアンケート調査を実施し、意識の把握をとおして着地型観光の導入の妥当性について検討することを目的とする。

2.2. 研究方法

本稿の目的を達成するために、以下の方法によって論を展開する。

はじめに、研究対象地域である星野村の概要および九州北部豪雨災害の被害を概観する。

次に、アンケート調査によって、星野村の住民が村の活性化についてどのような意識をもっているのか、災害前後の変化に注目しながら把握していく。本アンケート調査(調査用紙およびその回答方法については資料 1 を参照)は、2012 年 11 月に、八女市立星野小学校の 5, 6 年生、八女市立星野中学校の 1 ~ 3 年生 117 名とその保護者 84 名の計 201 名を対象に実施した。地域活性化というテーマの場合、どの年齢層を対象とするかでおのずと得られる結果も異なってくる。ここでは、星野村の未来を長きにわたって担っていく、比較的若年層および中年層にあたる人びとを主な対象者に設定した²⁾。

以上の結果から、今後の星野村における災害復興に果たす観光の役割、とりわけ着地型観光の可能性について考察を加えていく。

3. 星野村および九州北部豪雨災害の概要

3.1. 星野村の概要

福岡県八女市星野村は、2010年2月に八女地域1市2町2村の合併によって誕生した八女市の旧星野村の地域にあたる。福岡県の南東部、大分県との県境に位置した緑豊かな山村で、総面積の84%を山林が占めている。基幹産業は農業と林業で、農業の主要作物として茶と花卉、林業の主要樹木はスギとヒノキである。気候は、温暖で雨が多く朝夕の寒暖差が比較的大きいため、茶の栽培に適した条件となっている。また、村の大部分は急峻な地形であり、村内を東から西へと流れる星野川に沿って走る幹線道路沿いに集落や耕作地が点在している。山間部には村の代表的な景観である石積の棚田が広がっている。

また、標高が高く人口密度が低いため、星空がきれいな村としても知られている。そのため、自治体などは「星のふるさと星野村」を標榜してきた。1995年に「美しい日本のむら景観コンテスト」農林水産大臣賞受賞、2009年には、「日本で最も美しい村」連合へ加盟し、地域が自立した着地型観光を指向する要素がみられる。

3.2. 九州北部豪雨災害の概要

星野村では、2012年7月の九州北部豪雨により大きな被害が生じた。

九州北部豪雨とは、2012年7月11日から14日にかけて、本州付近に停滞した梅雨前線に向かって南から非常に湿った空気が流れ込み、九州北部を中心に降った記録的な大雨のことである。気象庁は、2012年7月15日に「平成24年(2012年)7月九州北部豪雨」と命名した。

この大雨により、河川の氾濫や土石流が発生し、熊本県、大分県、福岡県で死者21名、行方不明者8名を数え、九州北部を中心に住家損壊、土砂災害、浸水害、停電被害、交通障害等が発生した。とくにインフラへの影響は、道路や家屋、電気、水道、通信機器など日常生活の至るところにおよんだ。幹線道路は寸断され住民は一時孤立状態となり、自衛隊のヘリで救助されるなどした。迂回路となった山道では、市街地へ買い出しに向かう住民や救援物資を運ぶトラック、ボランティアの方々の行き来によって交通量が集中した。その結果、豪雨によって地盤が緩んでいた路肩に亀裂が入ったりするなど、二次災害も引き起こされた。

農産物にも甚大な被害が生じた。星野村の特産品

である星野茶は、茶園への土砂流入や法面崩落、農道の土砂被害により管理ができなくなるなどの被害がみられた。また、田畑への被害も大きく、泥流に埋没した田圃は土壌の入れ替えを施し元の稲作が出来るのに3年以上を要すると見込まれている。

今回の災害は、道路や建物といったインフラにとどまらず、村の基幹産業の1つである観光にも影響をおよぼした。災害の深刻さと自粛の意も踏まえて、さまざまなイベントが中止・延期されたのである。災害が起きた夏季は、祭りなどの交流人口を生む機会も多く観光客の来訪を期待していた地域住民や自治体にとって大きな損失となった。

4. アンケート調査の結果

4.1. 回答者の属性

対象者の年代別の割合は図2のとおりである。子どもを含めた若年層と中年層が回答者の多数を占めた。

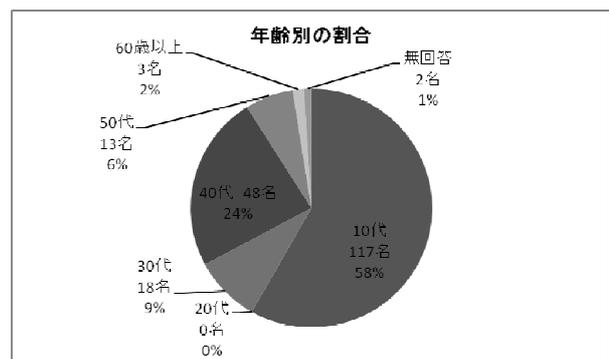


図2 回答者の年代別の割合

4.2. 星野村に対する住民の意識

4.2.1. 星野村への愛着

資料1の質問1「あなたは星野村が好きですか。」に対する回答である。これに対して、「ある程度そう思う」(111名、55%)がもっとも多く、「かなりそう思う」(66名、33%)、「あまりそう思わない」(16名、8%)が続いている(図3)。

資料1の問2でその理由を訊ねたところ、肯定的なものとしては、「自然が豊かで、地域の人とのつながりが深いから。」(52歳、女性、会社員)、「自分の生まれ育ったところだから愛着がある。」(38歳、男、自営業)などが挙げられていた。

否定的なものとしては、「将来就職先に困るから、あまり買い物をするところがないから。」(11歳、男、

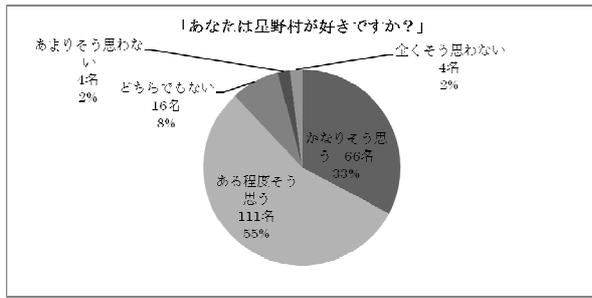


図3 質問1に対する回答

小学生)、「田舎で何もないところだから。」(15、女、中学生)、「八女市と合併して悪くなったから。」(52、男、パート)など、雇用や過疎化を理由とした内容が挙げられていた。

4.2.2. 星野村の抱える課題

図4は、資料1の質問16「星野村の課題は何であると思いますか。」に対する回答(最大3つまで選択可)である。

これに対し、「交通手段」(108名、54%)がもっとも多く、「自然災害」(103名、52%)、「少子高齢化」(87名、42%)が続いている。

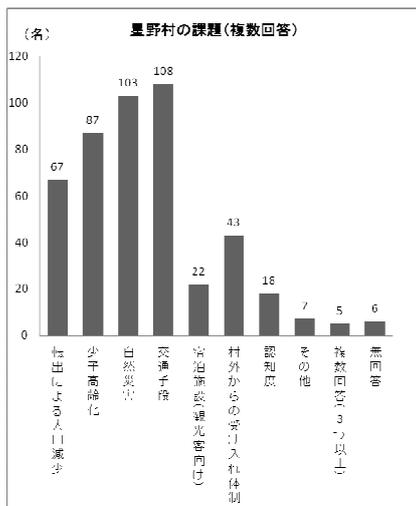


図4 質問16に対する回答

この回答を子ども(小・中学生)と大人という2つの世代別に比較したところ、子どもに関しては「交通手段」(44名、38%)、「少子高齢化」(42名、36%)が多くを占め、「転出による人口減少」(33名、28%)、「自然災害」(31名、26%)、「村外からの受け入れ体制(定住者向け住宅など)」(31名、26%)がほぼ同数で続いた。大人に関しては、「自然災害」(72名、86%)と「交通手段」(64名、76%)を選択していることが分かった(図5)。

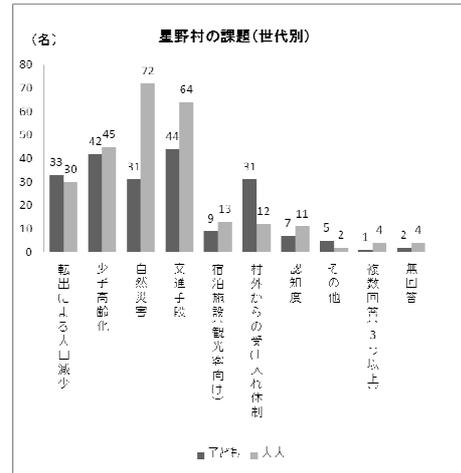


図5 質問16に対する世代別の回答

4.2.3. 観光地としての星野村

図6は、資料1の質問8「あなたは星野村はよい観光地であると思いますか。」に対する回答である。これに対して、「かなりそう思う」(34名、17%)と「ある程度そう思う」(92名、46%)が合わせて63%を占め、「あまりそう思わない」(36名、18%)と「全くそう思わない」(9名、4%)を合わせた22%を上回った。

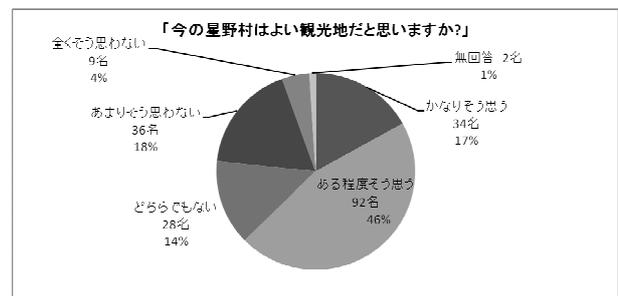


図6 質問8に対する回答

資料1の質問9でその理由を訊ねたところ、肯定的なものとしては、「四季折々の風景があり、都会に住む方への癒しの場に最適だと思う。」(38、女、会社員)、「ただ見るだけ、ただものを食べたり買ったりするだけの場所ではなく、そこにいる人とのかわりを求めてお客さんが集まってきているから(リピーター)。」(39、女、公務員)、「自然の豊かさや自然の恐ろしさを実際に見ることができるから。」(13、女、中学生)などが多く挙げられていた。

否定的なものとしては、「1日は楽しく過ごしていただけなのだが、次の日は行くところがないようで、星野村は1日(1泊)したら何もすることがないよだから。」(45、女、自営業)、「自然は美しいが、そのほかの魅力が何かあればと思う。」(44、女、パー

ト)、「本当に何もない。災害が起きていてもいなくても同じ。」(15、女、中学生)などが多く挙げられた。また、九州北部豪雨による被害を受け、「今回の豪雨で道が壊れているし、そんな所を見ても楽しめないから。」(12、男、小学生)、「九州北部豪雨後、景色が変わり、また来たいとは思わないから。」(32、女、パート)などといった、今回の災害によるダメージを挙げる記述も散見された。

4.2.4. 九州北部豪雨による影響

①災害前後での意識の変化

図7は資料1の質問4「九州北部豪雨の前後で、星野村について意識の変化はありましたか。」に対する回答である。さらに、「かなりそう思う」、「ある程度そう思う」と回答した91名(45%)に、質問5として具体的にどのような意識の変化があったか回答してもらった。

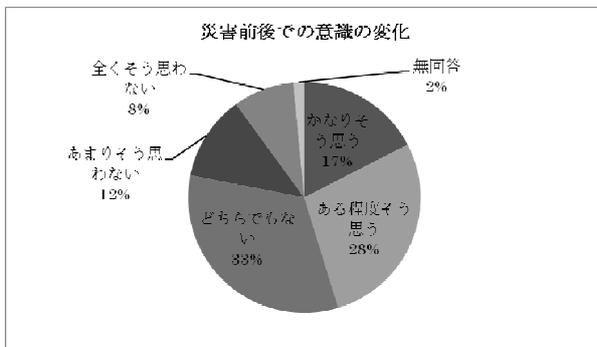


図7 質問4に対する回答

プラスの変化としては、「災害は他人事ではない、どこで起きてもおかしくないという危機意識を持ち、防災意識が高まった。」(51、女、パート)、「節水をするようになった。」(14、女、中学生)、「自然に興味を持った。」(14、男、中学生)、「テレビ等のメディアの災害報道により、今まで星野村のことを知らなかった人たちに知ってもらえたのではとポジティブに思うようになった。」(40、女、公務員)などが挙げられた。マイナスの変化としては、「また雨が降ったら土砂崩れが起きるのではないかと心配するようになった。」(12、女、小学生)、「次にまたこのような災害が起きたら、星野村から転出することを考えている。」(40、女、農林水産業)、「災害を機に、八女市との合併の影響で対応が少なくなったことを実感し、主要道路の寸断により交通が不便になり、これから先の星野村に不安を強く感じるようになった。」(52、男、パート)などが挙げられた。

②観光におよぼした影響

図8は、資料1の質問3「九州北部豪雨による被害のうち、観光に影響を及ぼすと思われるものを選んでください。」という問いに対する回答である(最大3つまで選択可)。

これに対し、「交通機関への影響」(171名、85%)がもっとも多く、これに続いて「地盤の変化」(88名、44%)、「観光資源の崩壊」(81名、40%)が多くなっている。

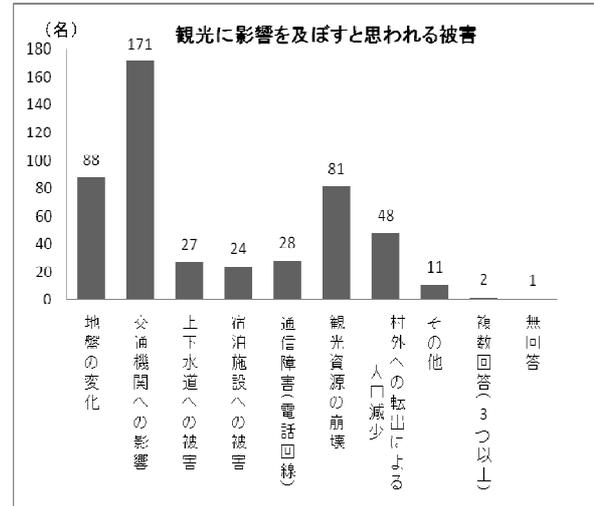


図8 質問3に対する回答

4.2.5. これからの星野村の観光について

①観光の重要性の意識

図9は、資料1の質問6「あなたはこれからの星野村の地域活性化において『観光』は重要な役割を持つと感じますか。」に対する回答である。

これに対して、「かなりそう思う」(73名、36%)、「ある程度そう思う」(87名、43%)という回答が約8割を占めた。

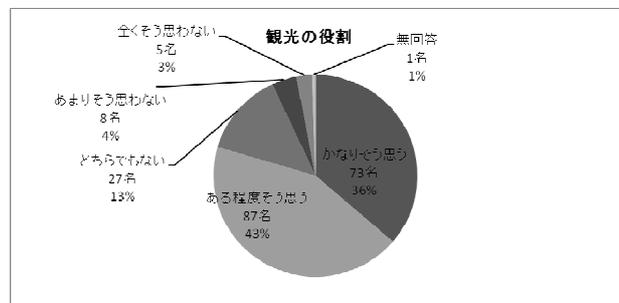


図9 質問6に対する回答

さらに、そのように回答した理由を質問7として具体的にどのような意識の変化があったかを訊ねた。肯定的な理由としては、「少子高齢化、人口の転出が

進む星野村では重要だと思う。星野村の良さをアピールし、多くの人に来てもらい、リピーターとなってもらい、星野村のファンを増やしていくことは、今後も村が生き残っていくために必要だと思う。」(45、女、嘱託職員)、「災害後でも観光に来てくれる方々もいるので、観光はこれからも重要な役割を果たしていくと思う。」(12、女、小学生)、「観光は、“こんなに復興しているよ”ということ表現できる場であるから。」(15、男、中学生)、「今回の災害で星野を離れた方もいるし、子どもたちも村に残るのはわずか。観光で村を活性化することで星野の良いところを知ってもらったら、移住したいという人も出てくかもしれないから。」(49、女、会社員)などが挙げられた。

否定的な理由としては、「今は観光できる状態ではないため、観光はしないでほしい。」(11、女、小学生)、「高齢化が進み、観光資源であるお茶や棚田の後継者がいなくなっているから。」(40、女、農林水産業)、「観光での収入はあまり期待できないから。」(47、男、自営業)、「観光で村民全体の生活が潤うのか疑問。」(52、男、パート)などが挙げられた。

②星野村の観光資源の意識

図10は、資料1の質問10「あなたが思う星野村の“観光地・観光スポット”と言えば、どこですか。」に対する回答である(最大3つまで選択可)。

これに対し、「星の文化館」(134名、67%)がもっとも多く、「茶の文化館」(124名、62%)、「平和の塔」(95名、47%)が上位に挙げられた。

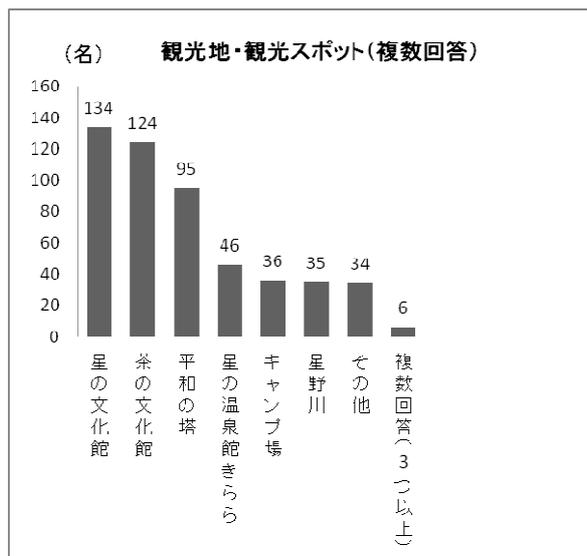


図10 質問10に対する回答

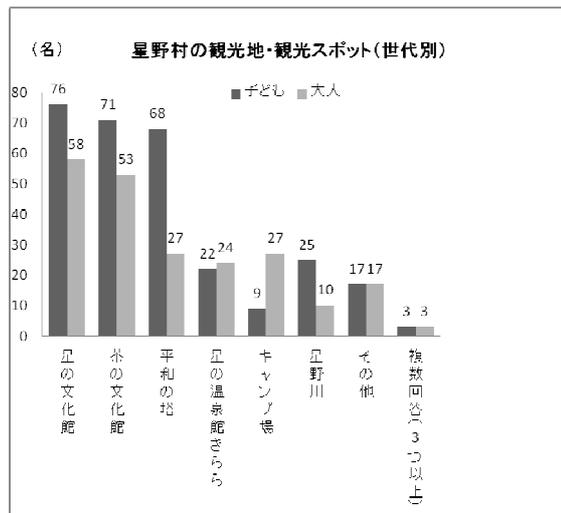


図11 質問10に対する回答(世代別)

この回答を世代別に比較したところ、子どもに関しては、「星の文化館」(76名、65%)がもっとも多く、「茶の文化館」(71名、61%)、「平和の塔」(68名、58%)がこれに続いている。大人に関しては、「星の文化館」(76名、69%)がもっとも多く、「茶の文化館」(53名、63%)、平和の塔(27名、32%)、「キャンプ場」(27名、32%)がこれに続いている(図11)。

③今後アピールすべき点

図12は、資料1の質問11「星野村の『観光』において、何をもっとアピールすべきだと思いますか。」に対する回答である(最大3つまで選択可)。

これに対し、「自然」(165名、82%)がもっとも多く、「伝統文化」(120名、60%)、「食」(70名、35%)が多かった。

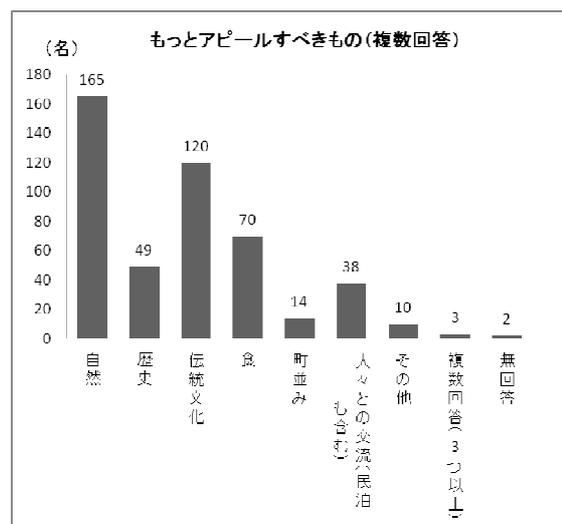


図12 質問11に対する回答

この回答を世代別に比較したところ、子どもに関しては「自然」(94名、80%)がもっとも多く、「伝統文化」(87名、74%)がこれに続く。大人に関しては、「自然」(71名、85%)が一番多く、「伝統文化」(33名、40%)、「人々との交流(民泊も含む)」(31名、37%)、「食」(30名、36%)がほぼ同数となっている(図13)。

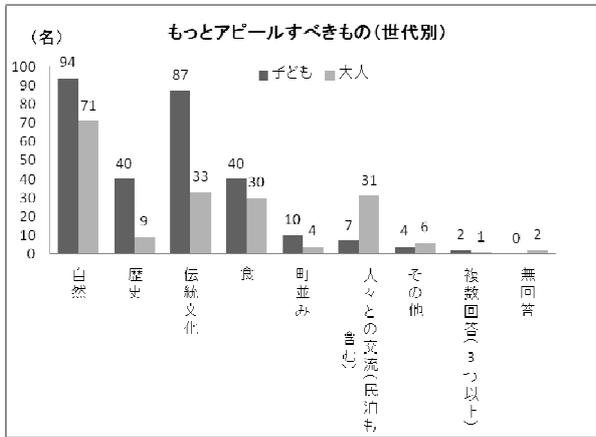


図13 質問11に対する回答(世代別)

④観光誘致すべき対象

図14は、資料1の質問12「今後星野村が観光客の誘致に力を入れるべき対象は誰だと思いますか。」に対する回答である(最大3つまで選択可)。

これに対し、「日本人女性(20代後半~30代)」と「外国人観光客」(ともに84名、各42%)がもっとも多く、「日本人男性(20代後半~30代)」(72名、36%)、「日本人女性(40~60歳)」(62名、31%)が続いた。

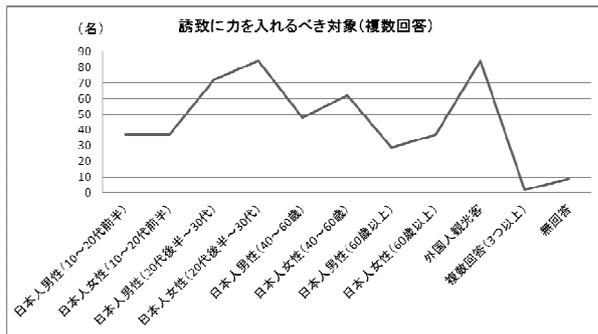


図14 質問12に対する回答

⑤星野村に適した観光形態

図15は、資料1の質問13「あなたが星野村に最も合うと思う「観光」形態を1つ選んでください。」に対する回答である。

これに対して、「4~5人程度の小規模ツアー観光」(84名、42%)がもっとも多く、「個人旅行」(45名、22%)、「大型バスを貸し切ったのバックツアー観光」

(22名、11%)が続いた。

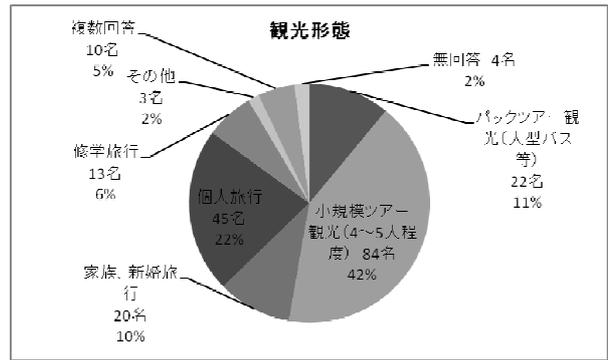


図15 質問13に対する回答

⑥着地型観光に対する意識

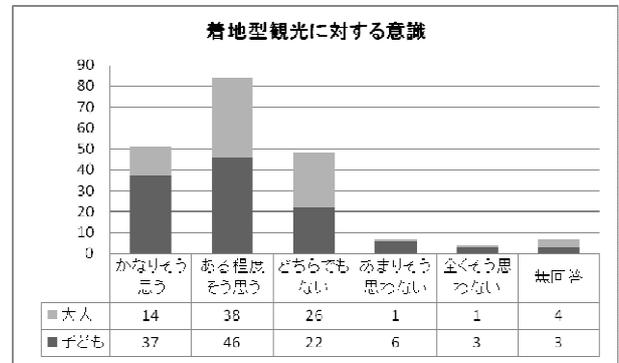


図16 質問14に対する回答

アンケート調査用紙に、「旅行の発地側で得られる目的地情報や発地側の観点(旅行商品の造成・販売に係る規模の経済性、商品情報の市場への伝わりやすさ等々)を重視して企画・立案・実施されるのを『発地型旅行』と呼ぶのに対して、旅行・観光の目的地である各地域(=着地)側が有する個別の観光資源(自然、歴史、産業、街並み、文化等々)に係る情報及び着地側での人々の観点(例：各地域での体験・学習等の活動)を重視して企画・立案・実施されるのを『着地型観光』といいます」²⁾という説明文を付記し、その後段に「『着地型観光』の考え方に共感できますか。」という設問欄を設けた(資料1の質問14)。その回答結果が図16である。

これに対して、「かなりそう思う」(51名、25%)と「ある程度そう思う」(84名、42%)を合わせて7割近くに達した。一方で、「あまりそう思わない」(7名、3%)、「全くそう思わない」(4名、2%)と少数ながら否定的意見を持つ回答もあった。

質問15でそのように回答した理由を訊ねたところ、肯定的な理由としては、「どこに観光に行けばいい

いかわからない人がいると思うから。」(14、男、中学生)、「一般の民衆が旅行者を受け入れ、体験型の農業をしたり、田舎の話を楽しんだりといったことは必要だと思う。」(45、女、嘱託職員)、「観光地でも受け身でなく色んなことにチャレンジすべき。」(40、女、公務員)、「体験することを取り入れる必要があると思う。見学して泊まって帰るのではなく、星野村を感じてもらいたい。」(52、男、会社員)、「地域資源を生かした観光は、長く持続できる事業だと思うから。」(48、男、公務員)、「観光地として作り上げるのではなく、今のありのままの生活、自然を体験してもらおうという点は星野村に合っていると思う。」(46、女、農林水産業)、「ボランティアの育成に力を入れ、案内人、名人など人材の育成に取り組んでほしい。いまだに埋もれている観光資源もあるのではないか。」(66、女、専業主婦)などが挙げられた。

否定的な理由としては、「あまりおもてなしするような観光がないから。」(46、男、自営業)に代表されるように、そもそも観光地としての魅力に欠けるとい認識にもとづく内容が挙げられた。

5. 考察

前章のアンケート調査の結果から、約9割の星野村の住民が、星野村に愛着を抱いていることが分かる(図3)。しかし、星野村はよい観光地であると考える住民はそれより減少し約6割にとどまった(図6)。よい観光地であると考える住民は、その理由として「自然の豊かさ」を挙げる回答が主であった。また、「観光客の人が結構来るから。」(11、女、小学生)、「平日でも他県から来ている人を見るから。」(14、男、中学生)というように、訪れる観光客を目にして、星野村がよい観光地であるということに気づいたと考えられる回答は、子どもたちに多くみられた。

一方で、約2割に当たる、よい観光地であるとは思わないとする理由としては、「災害の爪痕が残る現在の状況では観光を楽しめないから。」(12、男、小学生)といった内容が多く挙げられていた。その他に、「本当に何も無い。災害が起きていても起きていなくても同じ。」(15、女、中学生)というように、災害発生の有無にかかわらず、星野村に対して、よいイメージを持たない人もいた。また、「住んでいるのでよく分からない。」(15、女、中学生)といった意見もあり、いかに普段から身の回りにある観光資源に気づき発信していくかが重要となる着地型観光の課題が表われている。

これらの結果から、星野村を魅力的と考える人は大多数だが、災害による被害を受けたことによって、

観光地としては不利になったと考える人が多いことを示している。一方で、筆者が興味深いと感じた意見として、「自然の豊かさや自然の恐ろしさを実際に見ることができるからいい観光地だと思う。」(13、女、中学生)と、災害の体験をプラスに捉えているものがあつた。災害復興の1つとして、被災体験を新たな観光資源と位置づけることがある³⁾。つまり、被災の記憶そのものが、新たな観光資源となりうることも過去の類似の事例から学ぶことができる。観光振興とは、そもそも、人がわざわざそこを訪れるだけのものを創出することである。各地域の文化、伝統や自然に根ざした魅力は大切にしつつも、既存の観光資源や過去の成功体験にとどまらず、復興に果たす観光の役割といった、比較的新しい視点を付加し、発信していくことも重要である。

「九州北部豪雨の前後で、意識の変化があつた。」と答えた住民は、マイナスの変化として、災害の再発への危惧や、村外への転出を考えるようになったこと、あるいは災害後の風評被害に対する懸念を理由に掲げていた。これまでの類例においても、被災後に風評被害に苦しんだ地域は多く、風評の発生を完全に封じることは難しい。そのため、風評被害を最小限に留めるための取り組みが必要であり、正確な情報を迅速に収集し、的確に発信することが欠かせない。一方で、「村のためにできることをしたい。」(14、女、中学生)など、防災意識の高まりや自然への興味が増した、自分たちで村を盛り上げていかなければという意欲がわいたといったプラスの変化も見いだせる。先に述べたように、被災体験によって負の影響もあつたが、同時に、災害復興へ向けたプラスの意識も芽生えることは大いに注目すべきであろう。

「九州北部豪雨による被害のうち、観光に影響を及ぼすと思われるもの」として、「交通機関への影響」を選択した割合は、全体の85%に上つた(図8)。過疎地域での観光で問題となるのが、交通手段であるが、今回の災害によって唯一の幹線道路にも大きな被害が出たことは、条件不利地域に位置する星野村の観光にとって大きなダメージであつたと言える。

これまでの意見から、観光地としての星野村の今後に不安を抱く声が多く挙がっている。では、星野村におけるこれからの観光について、住民はどう考えているのか。「これからの星野村の地域活性化において『観光』は重要な役割を持つと思うか」という問いに対して、肯定的な意見は約8割に上つた(図9)。住民は観光によって星野村を活性化することに対して総論として賛意が得られていると評価できる。観光資源を知ってほしいという意見とともに、災害

に関するものとして、復興のためや被災状況を知ってほしいからという意見、また過疎化など水害を契機にさらなる問題の顕在化が懸念される点への対応策として期待するという意見が注目される。

「住民が思う星野村の観光地・観光スポット」を世代別で比較したところ、「平和の塔」や「星野川」は、大人に比べて子どもが選択した割合が高い(図 11)。その理由として、「平和の塔」は学校において平和学習の一環で学ぶ機会があること、また「星野川」は、夏に子どもたちの遊び場になるといった、子どもたちが身近に体験したことのある場所である点が考えられる。さらに、「もっとアピールすべきもの」を世代別に比較すると、「歴史や伝統文化」は、大人に比べて子どもの選択した割合が高かった(図 13)。その理由としては、前述の観光地・観光スポットと同様、子どもたち自身が学校で学んだり、クラブ活動の場面で経験したりした対象である点が考えられる。また、「人々との交流(民泊も含む)」は、子どもに比べて大人を選択した割合が高かった。これは、実際に民宿を経営している方の意見も含まれている影響も排除できないが、村外に居住する知人から自地域での交流イベントのことを聞き、逆に興味を持ったからという理由も複数挙げられていた。

以上 2 点の回答からは、子どもたちにとって、観光資源の発見や気づきは、主に学校教育の場でなされているということが示唆される。つまり、着地型観光にとって重要な要素である、地域住民が主体となった観光資源の発掘には、子ども時代の経験がその後の自地域を見つめる目にも影響を与えとも言える。また、大人にとっては、星野村の外部との関わりから逆に村内の情報を得たり、実際にイベントに参加したりといった経験から、自地域に改めて注目する取り組みがなされる循環の存在を指摘できる。

学校教育において、しばしば少子高齢化問題や過疎化問題が取り上げられる。その対応策として、観光で地域活性化を図ろうという意見に集約される場面が多いようだが⁴⁾、実際のところ、子どもたちが地域で具体的解決策を考える機会にはほとんどないと思われる。子どもたちにとって、学校は地域の観光資源を学ぶ場となっていると述べたが、観光名所や伝統文化に関する一時的、画一的な情報を得るだけでは不十分である。地域で新たに始まった取り組みやその実態についても触れていくことで、住民ならではの観光に関するアイデアが生まれることが期待される。「観光地側も、受け身ではなくいろんなことにチャレンジすべき。」(40、女、公務員)とあるように、ただ観光客を受け入れるだけでなく、自分たちの持っている観光資源で、訪れる観光

客をもてなすという姿勢が、観光地としての地域活性化だけでなく、真の意味での持続可能な地域づくりの起点となり、過疎化問題などの解決策にもつながる点を子どもたちにも伝えることが大切である。

「星野村に最も合うと思う観光形態」については、「4~5 人程度の小規模ツアー観光」と「個人旅行」の割合が高くなった(図 15)。その理由としては、星野村の道幅が狭く、大型バスの走行が適さないことや団体客を一度に収容する宿泊施設がないことも一因に挙げられよう。実際に、今までの観光形態にしても、大型バス観光などの団体はあまり見られなかった。この点については、今後星野村のどのような観光資源をどのように発信していくかが明確になるにつれて、それに適した形態についての意見が集約されていくべきである。

ところで、星野村は、過疎・高齢化地域という課題を抱えているが、逆転の発想に立てば、高齢者は、地域についての知識が豊富な人材が多いともいえる。都市部の観光客が求める、農村ならではの生活や伝統文化に関することはもちろん、災害復興の過程に果たす観光の役割としての、災害以前の豊かな自然やこれまでの自然災害についての語り部のような立場になり得る点は注目すべきである。実際に、「着地型観光の考え方に共感できるか」という問いに対して、約 8 割が肯定的であった(図 16)。約 2 割の否定的な理由についても、「災害で大きな被害を受けて、おもてなしできる状態ではないから。」(12、男、中学生)という声に代表されるように、災害の体験を語りの資源としてとらえた災害復興を提案していけば、着地型観光への理解を広げていけるのではないかと考えられる⁵⁾。

また、着地型観光を定着させていくには、地域をよく知る人材の育成が肝要である。アンケート調査の結果にも、「ボランティアガイドの育成に力を入れ、案内人、名人など人材の育成に取り組んでほしい。未だに埋もれている観光資源もあるのではないか。」(66、女、専業主婦)といった、観光ボランティアガイドの育成に期待する積極的な意見もみられた。地域の案内人は来訪者と接する、いわば観光・交流の現場の最前線におり、来訪者の声や思いを鋭く感知するアンテナであるとともに、逆に来訪者に地域の思いを伝えるメッセージャーでもある(尾家・金井編著、2008)。高齢者が、星野村を訪れる観光客に対して、高齢者ならではの観光プランを提案したり、情報を提供したりすることで、観光客が目的意識を持って観光でき、星野村を楽しめるのはもちろん、高齢者自身がやりがいをもてる活動となり、村の活性化につながっていく。また、同様に星野村の将来を

担う子どもたちに向けて、高齢者による体験型観光に関する地域学習の機会を設けることによって、子どもたちが当たり前存在すると感じている地域の資源がいかに価値を持っているのかということを知るとともに、高齢者のもつ貴重な知識を後世に継承していくことができる。

このように、災害からの復興を目指す星野村にとって「着地型観光」は有効な手法の1つである。この可能性を探る際に、アンケート調査の結果から「体験の存在」の重要性が見いだせる。星野村には、もともと着地型観光に十分な観光資源が存在していたが、実際の観光にうまく活かされていなかった面もあるだろう。それが今回の災害を契機に、星野村の将来や観光に対する住民の意識に変化がみられるなど、着地型観光の定着が図られる時機にあると考えられる。そのことは、観光をとおした災害からの復興へとつながっていくのである。

では、今後星野村はどのようにして着地型観光に取り組んでいけばよいだろうか。着地型観光には、災害復興への寄与という側面のほかにも、高齢化社会における新しい問題解決のあり方を提示する可能性について住民が知ることによって、着地型観光が重要視され、取り組みの定着が図られていくものと思われる。ここで重要なのは、着地型観光の可能性を住民が身を持って経験し、理解することである。そのためには、まず、住民が星野村の魅力に気づき、自分たちで地域資源を守っていききたいと、自地域への愛着を、実体験をもって感じていくことから始めるべきであろう。「実はすばらしい自然や文化があるのにあまり知られていない。星野村の子供たちが知らないのが残念。」(43、女、農林水産業)とあるように、現実には、さまざまな地域の資源が次世代へ継承されていくことは容易ではない。伝統的な民俗行事など、古くから存続していることが今後ますます当たり前ではなくなるという危機感を持ち、ただの年間行事としてだけではなく、重要な観光資源として認識することが継承の第一歩につながる。この意識の転換が、着地型観光の難しい点でもある。そこで、前述の「高齢者による体験型観光の地域学習の場」を設ける意義は大きいと考えられる。そして、地域の自然や文化を、「観光資源化」という視点を持って捉えることができるようになれば、地域の魅力を再認識していく循環が生まれることにつながる。「不便であることを逆に利用して、それを体験してもらおうのほうがいいと思う。」(42、女、パート)という意見は、今まで欠点と捉えられていたことが、「資源化」という視点をもつことによって観光資源となり得ることを示している。

6. おわりに

本稿は、九州北部豪雨による災害が発生した星野村を対象に、復興の手法の1つとして着地型観光の可能性について星野村の住民に対するアンケート調査結果に検討を加えることを目的として進めてきた。その結果、星野村の住民が星野村を知ること、それが結果として災害からの復興につながり、ひいては地域が主役となる着地型観光の展開へとつながっていくことが示唆された。すなわち、自地域について知ることが、住民だれもがすぐに始められる着地型観光の展開に向けた第一歩となるのである。

星野村では、2009年より農林水産省による「2009年度地方の元気再生事業『ディスカバー星野・星のツーリズムプロジェクト』」が進められてきた。地域資源の再発掘ならびに新たな資源の活用を見出すことで、地元の技術・産業・文化を大切な財産として活かし、住民自ら個々の経営者としての意識を高める取り組みが重ねられつつあった。しかし、今回の豪雨により被災した住民の中には観光など二次だという意識もあったと思われる。実際、「災害の被害にあっていない観光客に来られるのは嫌だ。」(11、女、小学生)、「災害があったことで、経済状況や将来への不安も多く、観光に力を入れる余裕がない。」(46、女、農林水産業)という声も上がっていた。

そのようななか、筆者がアンケート調査を実施した2012年11月、星野村では豪雨後初めての村の祭りとなった「子どもと大人の小さな村の学芸会」が開催された。各地区の祭りや運動会の中止が続き、残念に思っていた村民有志が企画・実施し、八女市立星野小学校の体育館に約400人が集まった。このように、被災者である住民自らが地域を元気づけようと行動する姿は、今後の星野村の災害復興ならびに観光復興を期待させるものである。

住民のなかには「災害時、八女市と合併したことによる対応の遅さを実感した。」(52、男、パート)、「八女市の知名度は高いが、星野村の知名度は低い。」(15、男、中学生)といった、八女市に合併したことが不利に働くという声もあった。確かに、合併後「八女市」としてひとくくり扱われることによって、星野村独自の取り組みやアピールは難しくなったかもしれない。しかし、「八女市のほかの地域にはない星野村ならではのアピールが必要だと思う。」(50、男、農林水産業)とあるように、八女市の知名度が高いことを利用し、星野村にしかない観光資源を積極的にアピールすることで、星野村が八女市のなかに埋没することは避けられるだろう。本稿でテーマとした「着地型観光」こそが、地域が主役の観

光形態そのものであり、平常時以外の災害復興の場面でもその役割を発揮していくことが期待される。

付記

本稿は、既発表論文が査読を経て新たに掲載されるものである。

本稿を執筆するにあたり、八女市立星野小学校および八女市立星野中学校の教職員および児童生徒の皆様ならびにその保護者の皆様には、アンケート調査でご協力いただいた。ここに深く感謝の意を表する次第である。

注

- 1) 観光庁『平成 23 年度観光白書』による。
- 2) 国土交通省総合政策局(2005)に示された内容をもとにアンケート調査用紙に記載した。なお、小・中学生に対しては、文意に変更を加えないように表現を平易に改めた説明文を別に設けて対応した。
- 3) 例を挙げると、島原市の雲仙岳災害記念館は、ドーム型スクリーンで火砕流・土石流を擬似体験できる「平成大噴火シアター」をはじめ、火山や防災について 11 のゾーンに分けて展示しており、日本で唯一の「火山体験ミュージアム」として知られる。また、阪神淡路大震災を機に開設された神戸市の「人と防災未来センター」では、語り部である被災者から体験談を聞き、震災の追体験をすることができる。このような観光の取り組みは、自然災害に限らず、広島原爆ドームなど、本来その地域にとって負の記憶や建築といった有形無形の遺産であるものや場所を観光資源としている例は多い(深見・井出編著, 2010)。
- 4) 学校において、地域と観光を結びつける取り組みを総称して観光教育と呼ぶ。そのなかで、過疎地域の活性化策としてあたかも伝家の宝刀のように「観光への取り組み」が解として示されることが多い。しかし、その具体的な内容にまで踏み込んだ事例はあまり知られていない実情がある(宍戸, 2008 ; Ogisu,R.,*et al.*, 2011)。
- 5) これに関して、井出(2012)は東日本大震災後の観光による復興の手法として「ダークツーリズム」を提唱している。災害復興と観光を考える際に重要な言及がなされていることから、以下にその一部を引用しておく。

「福島今後の観光復興を考える際に、重要な観光形態がある。それは“ダークツーリズム(Dark tourism)”と呼ばれる観光形態であり、欧米の観光学ではすでに研究対象として取り上げられているが、日本での馴染みはまだ薄いも

のであるかもしれない。この観光形態は、観光を“楽しいもの”“愉快的なもの”と考えるのではなく、学びの手段として捉えるものであり、“死”や“災害”と言った人間にとってつらい体験をあえて観光対象とする新しい観光のカテゴリーである。」

参考文献

- 井出明(2012)：東日本大震災後における東北地域の復興と観光について—イノベーションとダークツーリズムを手がかりに—。運輸と経済, 72(1), pp.24-33.
- 尾家健生・金井萬造編著(2008)：『これでわかる!着地型観光—地域が主役のツーリズム—』。学芸出版社。
- 国土交通省総合政策局(2005)：『沖繩観光における外国人向け着地型旅行の充実化及び販売促進のための調査』。
- 宍戸学(2008)：高等学校における観光教育カリキュラムの比較分析。観光ホスピタリティ教育, 3, pp.16-33.
- 茶谷幸治(2008)：『まち歩きが観光を変える—長崎さるく博プロデューサーノート—』。学芸出版社。
- 深見聡・井出明編著(2010)：『観光とまちづくり—地域を活かす新しい視点—』。古今書院。
- Ogisu,R.,Yoshihara,D.,Oshima,T.(2011)：The Possibility of Tourism Education in Elementary School : The Next Generation's Education in Kyoto City . Proceedings of JITR annual conference , 26 , pp.389-392.

資料1 アンケート調査用紙

※各項目の当てはまるものを選択してください※

●あなたの年齢 満()歳
●あなたの性別 (男・女)
●あなたの職業 a.会社員 b.公務員 c.自営業 d.農林水産業 e.パート f.専業主夫・主婦 g.学生 h.無職 i.その他()
●あなたの出身地 a.星野村 b.福岡県内 c.九州内(福岡県外)

質問(1) あなたは星野村が好きですか？

- a. かなりそう思う b. ある程度そう思う c. どちらでもない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

質問(2) 質問(1)でそう答えた理由は何か？

--

質問(3) 今年7月の九州北部豪雨による被害のうち、観光に影響を及ぼすと思われるものを選んでください。(最大3つまで選んでください)

- a. 地盤の変化 b. 交通機関への影響 c. 上下水道への被害
d. 宿泊施設への被害 e. 通信障害(電話回線) f. 観光資源の崩壊
g. 村外への転出による人口減少 h. その他()

質問(4) 今年7月の九州北部豪雨の前後で、星野村について意識の変化はありましたか？1つ選んでください。

- a. かなりそう思う b. ある程度そう思う c. どちらでもない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

質問(10) あなたが思う星野村の“観光地・観光スポット”といえば、どこですか？(最大3つまで選んでください)

- a. 星の文化館 b. 茶の文化館 c. 平和の塔 d. 星の温泉館きらら
e. キャンプ場 f. 星野川 g. その他()

質問(11) 星野村の「観光」において、何をもちとアピールすべきだと思いますか？(最大3つまで選んでください)

- a. 自然 b. 歴史 c. 伝統文化 d. 食 e. 町並み
f. 人々との交流(民泊も含む) g. その他()

質問(12) 今後星野村が観光客の誘致に力を入れるべき対象は誰だと思いますか？(最大3つまで選んでください)

- a. 日本人男性(10~20代前半) b. 日本人女性(10~20代前半)
c. 日本人男性(20代後半~30代) d. 日本人女性(20代後半~30代)
e. 日本人男性(40~60歳) f. 日本人女性(40~60歳)
g. 日本人男性(60歳以上) h. 日本人女性(60歳以上)
i. 外国人観光客

質問(13) あなたが星野村に最も合うと思う「観光」形態を1つ選んでください。

- a. 大型バス等を貸し切ったのバックツアー観光
b. 4~5人程度の小規模ツアー観光
c. 家族、新婚旅行
d. 個人旅行
e. 修学旅行
f. その他()

質問(5) 質問(4)でa, bを選択した方のみお答えください。

具体的に、どのような意識の変化がありましたか？

--

質問(6) あなたはこれからの星野村の地域活性化において「観光」は重要な役割をもつと感じますか？1つ選んでください。

- a. かなりそう思う b. ある程度そう思う c. どちらでもない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

質問(7) 質問(6)でそう答えた理由は何か？

--

質問(8) あなたは星野村はよい観光地であると思いますか？1つ選んでください。

- a. かなりそう思う b. ある程度そう思う c. どちらでもない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

質問(9) 質問(8)でそう答えた理由は何か？

--

※着地型観光とは※

旅行の発地側で得られる目的地情報や発地側の観点(旅行商品の造成・販売に係る規模の経済性、商品情報の市場への伝わりやすさ等々)を重視して企画・立案・実施されるのを『発地型旅行』と呼ぶのに対して、旅行・観光の目的地である各地域(=着地)側が有する個別の観光資源(自然、歴史、産業、街並み、文化等々)に係る情報及び着地側での人々の観点(例:各地域での体験・学習等の活動)を重視して企画・立案・実施されるのを『着地型観光』といいます。

質問(14) あなたは、この「着地型観光」の考え方に共感できますか？1つ選んでください。

- a. かなりそう思う b. ある程度そう思う c. どちらでもない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

質問(15) 質問(14)でそう答えた理由は何か？

--

質問(16) 星野村の課題は何であると思いますか？(最大3つまで選んでください)

- a. 転出による人口減少 b. 少子高齢化 c. 自然災害 d. 交通手段
e. 宿泊施設(観光客向け) f. 村外からの受け入れ体制(定住者向け住宅など)
g. 認知度 h. その他()

質問(17) その他、星野村の地域活性化、観光についてご意見、ご感想などありましたらご自由にお書きください。

--

以上で質問は終了です。ご協力いただき、誠にありがとうございました。

ご記入漏れがないか、もう一度確認お願い致します。